

いのちの大切さを伝える



いつの時代でもその大切さが叫ばれる「いのち」。日ごろ私たちが当たり前のように思っていることでも、子供たちの世界では少し違うようです。

テレビやゲームの影響でしようか、「死んだ人が生き返ると思うか」の問いに、「生き返る」と答える小中学生が少なからずいるようです。そのためなのでしょうが、いのちが軽視されている傾向が強くなっています。

今回は、いのちの大切さを子供たちにどのように伝えていいたらよいかを考えます。

いのちがあるから



鈴木家に待望の二人目の赤ちゃん健一君が生まれたのは、秋も深まる十月のことでした。その柔らかな笑顔を見るたびに、父親の隆さん（33歳）、母親の直子さん（30歳）の表情もほころびます。姉になった恵ちゃん（5歳）は、小さな弟が動いた





びに、手足をつついたりつまんだりして不思議そうです。

「こら、恵ちゃん。健ちゃんは寝ているんだから、ちよっかいを出して起こしたらかわいそうよ」

健一君の泣き声を聞いて、直子さんは恵ちゃんを叱ります。

「いじめてなんかいないよ。だって、こちよちよ動いてかわいいんだもん。何を考えているのかな。どうして動いているのかな」

直子さんは、恵ちゃんに分かるように説明する言葉がとつきに生まれません。「なんでかな、どうしてかな。恵ちゃんはどうしてだと思おう?」と言い、頭に浮かんだままに「いのちがあるからなんだよ」と答えました。それを聞いた恵ちゃんは、

分かったような分からないような反応を示します。

隆さんが会社から帰ってくると、直子さんは五歳の娘に「いのち」や「生きていく」ということを、どのように説明すればよいか尋ねました。

直子さんの話を頷きながら聞いていた隆さんは、「大人にとつて当たり前だと思っていることでも、それを小さい子供に上手に説明するのは、案外難しいものなのかもしれないね」と答えました。

※

小さな子供は、いのちとはどういうものなのかを深く知りません。それを言葉で伝えようとしても、やさしい言葉を使って分かるように教えるのは至難のわざです。どのようにすれば伝わるので

しょうか。

次に紹介するのは、小学校の児童たちに、いのちの大切さを伝える活動をしている橋本京子さんの話です。



いのちを

五感で

感じ取る

長野県松本市で美容院を営む橋本さんは、そのかたわら産業カウンセラーとして活躍しています。橋本さんが「いのちの出前授業」を始めたのは、平成十八年のこと。子供たちにいのちを感じてほしい、心や魂に栄養を与えたいと考えたのがきっかけです。橋本さんはこう話します。

——まず、子供たちに二人一組になってもらい、聴診器を渡します。それで

互いの心臓の鼓動を聞いてもらい、「これが『いのちの音』だよ」と伝えます。

その次に、子供たちにこう質問します。

「みんなには、お父さん、お母さんがいるよね」と。子供たちは「はい、います」と返事をします。続いて、範圍を祖父母、

曾祖父母へと広げていくと、小学生の年代ですと曾祖父母あたりでも何人か手が上がります。その中でいちばん年齢の高い子供に答えてもらいます。例えばヤスヒロ君としましょう。

「ヤスヒロ君は、お父さんとお母さんがいたから生まれてきたんだよね。お父さんお母さんも、お父さんお母さんがいたから生まれてきたんだよね。ヤスヒロ君のひいおばあちゃん、そのお父さんお母さんがいなかったら生まれてくるかし



ら」と聞くと、生まれてこないという答えが返ってきます。

父親と母親がいないと生まれてこないということを理解してもらい、ヤスヒロ君、父母、祖父母、曾祖父父母の相関図を黒板を全部使って書いていきます。

「この図を二十代前まで書いていくと、ご先祖様が百万人を超えるんだよ。知ってるかな？」と聞くと、子供たちがワーツと湧きます。

「その中のたった一人がいなくても、ヤスヒロ君は生まれてこないんだよ。さつき聞いたあの『いのちの音』、それも聞くことができなくなっちゃうの。『いのちの音』は、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、遠いご先祖様からずーつとヤスヒロ君につながってきたの。」

今度、ヤスヒロ君が大きくなって、好きな人ができて、結婚をして子供が生まれるでしょう。ヤスヒロ君の知らなかつたご先祖様、ヤスヒロ君が会うことのない孫の子供やその子供へ、あの音はつながっていくんだよ」

このように話をすると、子供たちは、自分は一人ではない、いのちのつながりの中にあるということに気づきます。

現在は、社会の中で孤立している人が増えていきます。それが原因の一つとなつて多くの問題が起こっているのではないのでしょうか。家庭や学校教育の中で自分と親、その親というように、縦たての関係を意識づけて教えると、状況がもつとよい方向へと変わってくると思います——

橋本さんのものには、「いのちの出前授業」を受けた子供たちからたくさん感想文が送られてきます。そのどれもが「いのち」を実感した感動が書かれています。「大人は、いのちを言葉や理り屈く、知識として捉とらえますが、子供たちは五感で感じ取ります。心で感じることで、いのちの

すばらしさや尊とうとさを理解することができ
るのでしよう」

橋本さんのこの言葉に、子供たちへいのちの大切さを伝えるヒントが隠かくされているのではないのでしょうか。



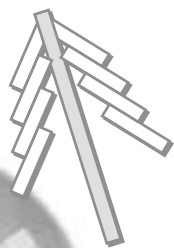
新たな仲間入り

話を鈴木家に戻しましょう。

鈴木さん一家は、健一君が生まれて約三か月後、宮参りのため近くの神社へ行きました。社務所を訪ねて用件を話すと、本殿へと案内されました。祝詞を上げてもらうのは鈴木さんたちだけでした。

お参りの作法について何も知らない隆さん夫妻は、儀式が進んでいくたびに宮司さんから宮参りの意味や起源などの説明を受けます。

宮参りは、古くは室町時代の武士社会に始まったとする説があります。家の宝でもある子供を氏神様のもとへ連れて行き、氏子として、また地域社会の一員と



して認められることが目的とされていきました。

現在では、子供が無事に生まれた

ことを感謝し、これからもすこやかに成長することを神に祈る意味も持ちます。

儀式が進んでいき、宮司さんから「では、お子さんを泣かせてください」と言われ、隆さんと直子さんは「え、なんで?」と思いました。それが顔に出たのでしよう。宮司さんは優しい表情で次のように説明しました。





「私たちの先祖をたどっていくと、最終的には神様に行きあたります。子供を泣かせるのは、氏神様に新たな仲間ができたことをお知らせするため、泣き声を聞いていただくのが目的なのですよ。そうすれば氏神様がこの子を見落としたりしませんから」

それを聞いて安心した直子さんが健一君の顔を覗き込むと、小さな寝息をたててすやすやと眠っています。軽く手足をつねっても目を覚ましません。困った隆さんが「すみません、起きないんですけど……」と言うと、宮司さんは笑いながら「大丈夫ですよ。神様はきつと見ていてくださいますから」と答えました。

儀式が終わり、隆さんたちは宮司さんにお礼を言って神社を後にしました。

だから大切にしなくちゃ



神社からの帰り道、宮参りを終えた隆さんと直子さんは、少しほっとしていました。

「健一はつねつても起きなかつたなあ。いつもはちよつとしたことで泣き声をあげるのに」

「神様の前で安心していただけのかしら。それに恵も静かでない子だつたわね。えらかつたわ。それとも、緊張しちやつたのかな？」

直子さんが恵ちゃんの頭をなでると、恵ちゃんがこんなことを言いました。

「お父さん、健ちゃんも恵も神様の仲間なの？」

隆さんは、恵ちゃんに分かるようなやさしい言葉を選びながら説明します。

「神社の人もそう言つてたね。お父さんもお母さんも、恵も神様の仲間なんだ。

今日、神社に行つたのは、健一が生まれてくるのを神様が待つていたから、生まれましたよつて知らせるためなんだよ。

お花も虫も、健ちゃんも恵のお友だちもそう。みんな神様からいのちをもらつてているんだ。だから大切にしなくちゃね」

「そうなんだ。神様からもらつたものは大切だもんね」

直子さんが「恵が今日いい子だつたこと、神様になつたおじいちゃんおばあちゃん

んも、きつと見ていてくれたと思うよ」と褒めると、恵ちゃんは満面の笑みを浮かべ、ベビーカーの中で眠る弟の小さな

手に自分の手を重ねました。その姿を見て、隆さんと直子さんは、もう一つ仕事を終えたように感じたのでした。



孫に伝える

いのちの

つながり

次の話は、がんによる闘病生活を送り、生命の危機の中で得た経験を通して、自分の孫にいのちとは何かを伝えた平沼紀子さんのエピソードです。

平沼さんは平成三年に胃がんを患い、死を身近に感じました。幸い手術は成功し、そのときの経験から最期の時を受け入れる心構えができました。

回復した平沼さんは、『葉っぱのフレディ——いのちの旅』（童話屋刊）を、幼

稚園に通う孫の清香さんのために買い求めました。この絵本は、フレディという名の葉っぱが、散ってゆく仲間たちの姿を見たときに死への恐れを感じ、みずから散っていくときに、いのちの永続性やいのちをつなぐことの大切さに気づく心情が描かれています。

ある日のことです。清香さんにせがまれて『葉っぱのフレディ』を読み聞かせていると、自然とこんな言葉が出てきました。

「サヤちゃん、葉っぱのフレディも死んじゃったでしょう。人間も、みんな死ぬんだよ」

それを聞いた清香さんは、びつくりして、こう聞きました。

「こつたん（清香さんが平沼さんと呼ぶとき

の愛称)も死ぬの?」

そのとき平沼さんは、闘病中には決して受け入れることができなかつたことを言いました。

「そうだよ。こつたんも死ぬんだよ」

清香さんは、次に「おじいちゃまも死ぬの?」と聞きます。

「うん、おじいちゃまも死ぬんだよ。だけど、こつたんもおじいちゃまも今すぐは死なないよ。まだまだこれから、いっぱいやることあるから、まだ死なないよ」
少し安心した清香さんは、今度は「パパも死ぬの?」と聞き、平沼さんは「うん、パパも死んじゃうよ」と答えました。
その次に「ママも死ぬの?」「そう、ママも死ぬの」という会話が交わされます。
いちばん最後に清香さんは、こう尋ね



ます。

「清香も、死ぬの？」

平沼さんははつきりと言いました。

「そう、清香も死ぬの」

そして、こう続けました。

「だけれども、サヤちゃんはまだまだこれから、こつたんみたいに顔にいつぱい



皺しわができたりに、体がもう弱くなったりし
ないと、死なないんだよ。

これからお勉強をしたり、友だちと遊
んだり、いろんなことをしなければなら
ない。結婚して赤ちゃんも産うまなきゃい
けないし、やることがいっぱいある。

人は生きて、優しくしたり、役に立つ
たりして人のために一生懸命いろんなこ
とをしなければならぬの。そうして神
様が『もういいよ』って言ったら死ぬん
だよ」

その言葉を聞いた清香さんは、まだま
だ死なないということを理解し、安心し
て納得しました。祖母である平沼さんの
言葉。それを通して、いのちのつながり
や継統性ということが、孫の清香さん
の心に強く残ったことでしょう。

家族を通して考える

モラロジー研究所が毎年秋に開催している「生涯学習フェスタ」では、活動の一環として近隣の各市教育委員会の協力のもと、「家族のきずな」をテーマにエッセイを募集し、毎回、多数の作品が寄せられます。それらの作品には、家族のきずなや家族への感謝、そしていのちのつながりの大切さなど、豊かな感性があまるところなくつづられています。

子供たちは、無垢の存在です。多くの子供たちは、普段、いのちや死というものについて深く考える機会はありません。しかし、家族を通して、自分のいのちが遠い先祖とのつなが

りの中にあり、そのうちの一人でも欠ければ存在できないと知れば、自分も大切な存在だと気づくでしょう。また、望まれているところにあると知れば、自分のいのちは自分だけのものではないと気づくことができますはず。

子供たちに「いのちの大切さ」を伝えていくため、周囲の大人たちがさまざまな機会に言葉と行動で示していきたいものです。その大人の姿が子供の心に残るとき、いのちを大切にしている深い思いが生まれることでしょう。

家族のきずな